

文化運動としての「イラストレーター毛利彰の会」に関する研究

筒井 宏樹・安藤 隆一・尾崎 文代・村瀬 謙介・毛利 葉

A Study on “Illustrator Mouri Akira Association” as a culture movement

TSUTSUI Hiroki, ANDO Ryuuichi, OZAKI Fumiyo, MURASE Kensuke, MOURI You

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第15巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.2

平成31年 3月 31日発行 March 31, 2019

文化運動としての「イラストレーター毛利彰の会」 に関する研究

筒井宏樹*・安藤隆一**・尾崎文代***・村瀬謙介****・毛利葉*****

A Study on “Illustrator Mouri Akira Association” as a culture movement

TSUTSUI Hiroki*, ANDO Ryuichi**, OZAKI Fumiyo***, MURASE Kensuke****,
MOURI You*****

キーワード：市民文化，菱田春草，リアリズム，毛利彰，市民主体の文化政策

Key Words: Civil culture, Hishida Shunsou, Realism, Mouri Akira, Cultural policy of citizens initiative

はじめに

「市民文化とは、市民が地域に文化をつくる営みとその営みがもたらす所産である、と定義するならば（中略）心の原風景である歴史的建造物を保存し、文化遺産としての地名を復活し、街並みを保存し、景勝地の美観を守り、まつりを復活し、手づくりでイベントを創出するなど、地域に美しさ、たのしさ、よろこびを創り出す市民自発の、無償の営みが全国各地に広がっている⁽¹⁾。」

鳥取市でも、戦後の日本を代表するイラストレーター毛利彰について、「作品や資料の収集・整理・保存・公開等を行い、その仕事の文化的・社会的価値を多面的に明らかにするとともに、多様な参加を得て、生誕地鳥取のまちに活かし全国へ発信することを通して、絵画やイラストレーションの魅力を広げ、次世代に継承していくことを目的⁽²⁾」に、2016年8月27日に「イラストレーター毛利彰の会」が、長男毛利葉を中心に発足し、後述の様々な活動をおこなっている。

全国的な評価の高い芸術家や文化人について、その顕彰等については、行政のイニシアティブによるものが全国で多く見られるが、この「イラストレーター毛利彰の会」の運動は「市民自治による市民文化の形成を基本として市民主体によって実現できる⁽³⁾」という市民主体でなされている。

こうした芸術家を市民主体で顕彰してきた活動の先行事例として、長野県飯田市出身の近代日本画

家・菱田春草を顕彰する運動があげられる。

春草は、1874年に飯田市仲ノ町（当時は筑摩県飯田町）に生まれ、岡倉天心から強い影響を受け、横山大観と共に近代日本画の天才と称せられたが、36歳でその生涯を閉じた。当初、彼の技法は、従来の日本画に欠かせなかった輪郭線を廃した無線描法を試みた「朦朧体」と酷評された。しかし、後に、この朦朧体で得た技法を生かしながら装飾性と写実性を兼ね備えた日本画の完成を目指し、代表作の〈王昭君〉〈賢首菩薩〉〈落葉〉〈黒き猫〉の4点の作品が国の重要文化財に指定されている。

こうした春草の業績を顕彰しようと、1947年に市民主体の「春草会」が発足し、法要や講演会などを行ってきたが、1954年には、後に国の重要文化財となる3点を含む代表作8点の展覧会を開催している。この展覧会は、当時、飯田市には美術館はなく、八十二銀行飯田支店の3階で行われた。

その後、1988年に飯田市美術博物館が開館され、以降展覧会事業はここに引き継がれている。現在、飯田市美術博物館は、「朦朧体」の代表作といわれる「菊慈童」をはじめ春草の作品30点を所蔵している。

こうした「民」から始まり、「公」が美術館を建設するといった地域の偉人を顕彰する運動は、次に飯田市出身の後藤総一郎が語っているように、地域全体のあり方の提起に繋がっていくのである。

「この仕掛けられた“地方の時代”をテコにして、

*鳥取大学地域学部附属芸術文化センター

**しんきん南信州地域研究所

***鳥取大学附属図書館

****鳥取大学地域価値創造研究教育機構

*****とっとり県民活動活性化センター

(中略)日本や世界に誇りうる固有の“文化”遺産を正しく再評価し、その香りを伊那谷の人びとの共通遺産として受け継ぎ、(中略)日本画のエポックを劃した菱田春草の明確な思想史的美術史的再評価と、その美意識の継承展開のまさにセンターとしての「菱田春草館」の建設である。それを文化核として、伊那谷の人びとが、すべて絵筆を持つという精神と生活を伝統としてゆくことができたとしたら、すぐれて高くしかももっとも大切な“情操”の世界を形成してゆくこととなろうという期待を私は描くのである⁽⁴⁾と。

芸術や文化をテーマとした「地域づくり」では、1990年代から顕著に見られるようになった地域での美術館建設によるもの、また、2000年代から始まる他地域の優れた芸術家の参加による「アートフェスティバル」を開催するイベント方式などによって、地域の活性化を図ろうとするものも多い。こうした政策も一定の有効性があるものとして、評価されている。しかし、「地域づくり」の主体であるべき住民自身が芸術や文化の振興を担っているかという点、最終章で分析している通り、必ずしもそうではないという事例も見受けられる。

そうした中で、後藤が述べているとおり、その地域の「すぐれて高くしかももっとも大切な“情操”の世界を形成してゆく」という「地域づくり」の目的を実現していくには、住民の手によることが重要である。

「伊那谷の人びと」を「鳥取の人びと」と言い換えてみよう。伊那谷における菱田春草の顕彰運動は、鳥取における毛利彰のそれと考える事が出来よう。「地域に美しさ、たのしさ、よろこびを創り出す市民自発の、無償の営み」こそが、そこに生きる人々には、まず、重要なことであり、「イラストレーター毛利彰の会」がそれを担うのではないかと期待されている。

本稿では、第1章で毛利彰の人と作品を論じ、第2章で地域における「毛利彰」をテーマとした文化運動の全体像を提示し、第3章で「イラストレーター毛利彰・原画展 IN 鳥取大学」の実績と評価について、第4章でこの「地域での文化運動」を総括する。(安藤隆一)

第1章 毛利彰の作品：リアリズムの内実

本章では、毛利彰の作品について論じていく。毛利彰は、1935年鳥取市本町で生まれ、57年に上京し、伊勢丹のイラストレーションを14年間にわたって

手がけた。その後、2008年に73歳で亡くなる直前までフリーランスのイラストレーターとして活動した。2019年1月に刊行した『イラストレーター毛利彰の軌跡：鳥取美術と戦後日本のイラストレーション史のなかで』⁽⁵⁾において、毛利彰の辿った足跡を、画家を目指していた「鳥取時代」、伊勢丹の新聞広告のイラストレーションを手がけた「伊勢丹時代」、そして手塚治虫『火の鳥』シリーズのブックカバーや『歴史群像シリーズ』などのイラストレーションなどで知られる「フリーランス時代」の3つの時代区分に分けて詳細に考察した。さらに、本書では、画家を目指していた「鳥取時代」の彼の特性が、「伊勢丹時代」ないし「フリーランス時代」に何度も帰帰する点について分析した。つまり、鳥取時代に培った彼の純粹美術的要素が、大衆文化であるイラストレーションとせめぎ合うところにその作品の特徴が見出されるのである。

こうした毛利彰の作品の特徴を踏まえたいうえで、本章では、彼のリアリズムの内実について、より詳細に論じていくことを試みる。

まずは『イラストレーター毛利彰の軌跡：鳥取美術と戦後日本のイラストレーション史のなかで』で分析した毛利彰のリアリズムについて確認しよう。彼のイラストレーションの特徴は、誰もが認めるようにリアルな作風にある。このリアルな作風は、東京芸術大学油画科を目指して、1954年に阿佐ヶ谷美術予備校で3ヶ月間にわたって石膏デッサンを修練した経験によって培われたものである。彼自身が「あの頃何もやらなかったら、今日はないと思いますね」と発言していた。

毛利彰のリアルな描写力は、石膏デッサンによって培われた部分が多い。しかしながら、少なくとも彼の鳥取時代における油彩画のリアリズムは、「物の外見を写す」という写実を単に目指していたわけではなかった。彼の「グルミーな色彩」は、「外見のなかに隠された真実」が色濃く滲み出たような陰鬱さであった。

また、彼の油彩画に見られた「グルミーな色彩」という特性は、伊勢丹時代のイラストレーション《ペンキ塗りたて春の色》のペンキのようなマチューール、さらには後年のオリジナルシリーズのどろどろとした色彩として表出されていた。

つまり、毛利彰のリアリズムとは、石膏デッサンによって培われた卓越した描写力とともに、「外見のなかに隠された真実」が滲み出したようなどろど

ろとした色彩にあったといえる。これらは、言いかえれば概ね、客体の構造を把握する能力と、主体の実存の反映ともいえるだろう。それでは、これらを考察することで彼のリアリズムの内実をより明らかにしていきたい。

まず、毛利彰の客体の構造を把握する能力がいかんなく発揮された顕著な例は、伊勢丹時代の写実路線のイラストレーションにおいてである。彼は伊勢丹時代の60年代にかけて「ニコリお姉ちゃん」から「写実路線」へと絵柄を徐々に変化させていった。「写実路線」への変化は、筆を鉛筆に変えたことによって実現した。毛利は鉛筆の細やかなグラデーションを新聞紙面でも実現させるべく、連日印刷テストを繰り返したという。ここで重要なのは、毛利は新聞紙面でリアルな描写を実現させただけでなく、対象の素材の質感を見事に描き分けたことである。綿、絹、麻、ウール、ツイード、毛皮などの素材の質感をよく把握し、それを新聞紙面で表すことができた。リアルな描写と対象の把握は必ずしも一致するものではない。むしろ描写力が高ければ、対象に対する理解がなくても、画面をそれらしく完成させることが可能となるからだ。だからこそ、毛利による正確な素材の質感の描き分けには対象の構造を把握する能力が必要となり、誰もができることではないといえるだろう。

このように毛利彰が客体の構造をよく把握していた例として、他には蝶の描写が挙げられる。《オリジナル マイ・マドンナ》【図1】の画面右上を舞う蝶は、アゲハチョウ科のギフチョウである。彼が幼少期に久松山を駆け回り、蝶の採集をしていたことはインタビュー等で語られており、その頃に培った蝶に対する彼の知識が絵によく反映されている。



図1 毛利彰《オリジナル マイ・マドンナ》1984年

さらに彼は久松山でヒサマツミドリシジミを見たことがあったという。久松山に因んで名付けられた幻の蝶で、1962年に日本鱗翅学会でその生活史解明者に賞金がかけられたほどである⁽⁶⁾。このように彼が蝶という対象、その種類や形態などをよく把握したうえで識別可能な描写をしていたことが窺える。

次に毛利彰の色彩感覚について論じていく。彼は鳥取時代の1954～55年頃に美術や制作についてのメモやスケッチをノートに記していた⁽⁷⁾。そこで過去の画家の絵画を彼なりに分析したスケッチがある。例えば、フォーヴィズムの画家として知られるドランの作品《裸女》(1925年)についてスケッチ【図2】とともに次のようなメモがある。背景色に「ビリジアン+ロゼンナー、バンドセンナー」、床に「バンドセンナー+ライトレッド、黒」、人物に「ネプルス、ライト+ホワイト」と記載されている。「ロゼンナー」はローシェンナ、「バンドセンナー」はバーントシェンナとして現在知られる色名である。「ネプルス」は「ネーブルス・イエロー」のことであろう。これらのスケッチとメモからは、毛利が色彩をかなり細やかに分節化して把握していたことがわかる。彼自身、「絵の具はアクリル。10色。黒は使わない。3色を混ぜ合わせて黒をつくる。若い頃から黒のなかにも色を見る」⁽⁸⁾とコメントしており、色彩感覚について相応の自信を持っていたことが窺える。

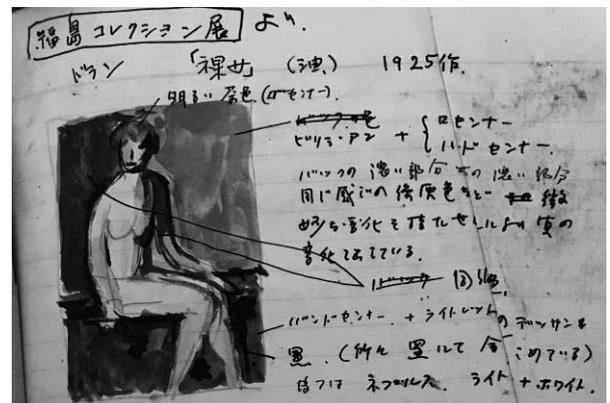


図2 毛利彰のノートのスケッチ 1955年

以上のことから、毛利彰のイラストレーションにおけるリアリズムは、「物の外見を写す」という写実を単に目指したのではなく、衣類の素材や蝶の種類など対象をよく把握したうえで成り立つものであった。また、毛利のリアリズムは「グルミーな色彩」、つまりどろどろとした色彩が否応なく彼の特性として滲み出すところにそのイラストレーション

の特徴があったが、彼自身、豊かな色彩感覚の持ち主であったといえる。こうした色彩感覚こそが、彼の実存を細やかにそのイラストレーションに反映させたのである。(筒井宏樹)

第2章 地域における「毛利彰」をテーマとした運動のあゆみ

1 イラストレーター毛利彰没後から会の発足まで

2008年4月7日、毛利彰が故郷鳥取の療養先で亡くなったとき、いち早く偲ぶ会を企画したのは、伊勢丹時代から共に仕事をしてきたスタジオ・ユニの同僚だった。亡くなって1か月後の2018年5月17日には早くも東京銀座の三笠会館で「毛利彰さんを偲ぶ会」が開催された。さらに同年9月22日～26日には、同じく東京銀座のクリエイションギャラリーG8で「追悼毛利彰展」が開催され、松江出身で同じ時代に西武百貨店でイラストレーターとして活躍した山口はるみが推薦文を書いている。期間中の24日に同会場で開かれた「偲ぶ会」には、当時東京イラストレーターズ・ソサエティ会長だった安西水丸や宇野亜喜良、和田誠、山口はるみといった著名なイラストレーターたちも多数出席した。6月7日付の朝日新聞の「惜別」欄にも掲載され、関係者や毛利彰の影響を受けていた人たちには衝撃だったようだ⁽⁹⁾。

ちなみに生前にも、2007年8月6日～9月9日、同じくスタジオ・ユニの同僚であった中山泰次郎らが治癒を祈念して、神奈川県湯河原町のスペース楠樟(くすくす)で「孤高の絵師・毛利彰ポスター展」を開催している。

鳥取でも、すでに1970年代後半から鳥取県立博物館、鳥取市あおや郷土館、米子の「本の学校」等で原画展が開催されていたこともあり、同世代や地元のデザイナーには知られており、亡くなった時にちょうど鳥取市あおや郷土館で歴史群像シリーズの原画展が開催中だったこともあり、日本海新聞に追悼記事が大きく掲載された。

没後1年となった2009年4月4日～11日には、画家の山本恵三や鳥取県デザイナー協会が中心となって、「毛利彰遺作展」が宝林堂ギャラリーで開催(主催:毛利彰展実行委員会)され、翌年(2010年)の4月9日～5月9日には「毛利彰遺作展」が鳥取市あおや郷土館で、さらに2011年2月16日～3月31日には「イラストレーター毛利彰の仕事」が鳥取県立博物館で開催された。その後も単発的に原画展が開

かれることはあったが、書籍や雑誌などへ作品が掲載される機会がなくなってすでに十余年、若い人たちが毛利彰のイラストを観る機会は失われ、徐々に遠い存在になっていった⁽¹⁰⁾。

2 「イラストレーター毛利彰の会」発足(2016年8月27日)

2013年4月に、鳥取県内のボランティア・地域づくり・NPO活動の支援活動に従事するために毛利彰の長男毛利葉(以下「葉」という。)が鳥取に帰郷し、長年鳥取でタウン誌の発行など、地域づくり活動を行ってきた安藤隆一と2014年2月に会う。その後、生前から鳥取県の総合情報誌『とっとりNOW』(企画・編集・発行:鳥取県広報連絡協議会)の取材で毛利彰と懇意だった内田克彦と安藤が共同代表の「知のカフェ」に葉が参加したのを機に、毛利彰のファンで「知のカフェ」に参加していた農業青年の鈴木英之らを加え、会の発足が模索された⁽¹¹⁾。

その後、“毛利彰の仕事・作品を整理し、鳥取のまちに活かす活動をはじめよう!”と、「毛利彰の会(仮称)」を立ち上げ(2015年11月)、原画を見たり、ゆかりのある方々の話を聞きながら、まず毛利彰の仕事を知ろうということで勉強会を開くこととなった⁽¹²⁾。

そして、2016年8月27日、鳥取市の城下町とっとり交流館高砂屋において、正式に「イラストレーター毛利彰の会」が発足した。この日に参加した鳥取西高教諭で書道家の蔵多敏夫や毛利彰の長女みきの同級生を中心とした「I love あおや 37メンバーズ」⁽¹³⁾のメンバーらが加わり、その後会の世話人会が構成されていくこととなる。

3 「イラストレーター毛利彰の会」の活動(2016年8月～2019年1月)

イラストレーター毛利彰の会は「イラストレーター毛利彰の作品や資料の収集・整理・保存・公開等を行い、その仕事の文化的・社会的価値を多面的に明らかにするとともに、多様な参加を得て、生誕地鳥取のまちに活かし全国へ発信することを通して、絵画やイラストレーションの魅力を広げ、次世代に継承していく」ことを目的に、以下の5つの事業を会則に掲げた。

- (1) イラストレーター毛利彰の作品や資料等の収集・整理・保存
- (2) イラストレーター毛利彰の作品や資料等の

公開

- (3) イラストレーター毛利彰の仕事等に関する調査・研究、情報発信
- (4) 絵画・イラストレーション等に関する学びや交流機会の提供
- (5) 他、会の目的達成に必要な事業

発足から2年半は、(2)の「作品の公開」がメインとなった。2017年1月の山陰合同銀行鳥取ギャラリーを皮切りに、特に、毛利彰没後十年の2018年は、鳥取市あおや郷土館「毛利彰とその家族」イラストレーション展、鳥取県立図書館、わかさ生涯学習情報館、南部町立図書館、鳥取大学附属図書館での「本の仕事」原画展、日南町美術館での「毛利彰の仕事」原画展が開催され、喫茶店や銀行に1960年後半から1970年初頭当時の伊勢丹ポスターのミニ展示も行われた。また、『とっとりNOW 117号』で14頁の特集が生まれ、会の存在を地域にアピールする年となった。とくに、鳥取大学では学内で実行委員会がつくられ、附属図書館、コミュニティ・デザイン・ラボ（以下、「CDL」という。）の2会場でテーマの違う企画展が催され、多くの若い世代が毛利彰の作品に触れる機会となった。一方、(4)の「学び・交流の機会」では、鳥取大学附属中学校と鳥取市立青谷中学校での「毛利彰」をテーマにした美術の研究授業や県立鳥取西高校での筒井宏樹（鳥取大学地域学部附属芸術文化センター准教授）講演会等、次世代にむけたチャレンジが芸術教師たちの発案で相次いで行われた《教育に活かす実践》。また、鳥取市青谷町にゆかりのあるイラストレーター3氏（宮本栄一、瀧順子、毛利みき）の紹介を兼ねて「イラストレーションによるまちづくりフォーラム」も開催された《地域に活かす実践》。そして、翌年（2019年）1月31日に、ブックレット『イラストレーター毛利彰の軌跡：鳥取美術と戦後日本のイラストレーション史のなかで』（著者：筒井宏樹）が発刊され、(3)の「調査・研究」の成果として結実した。

＜発足から2年半のうごき＞

- (1) 2016年8月27日 城下町とっとり交流館 高砂屋「イラストレーター毛利彰の会&設立総会」参加28名、講演「鳥取民藝美術館の運営から学ぶ」木谷清人（公益財団法人鳥取民藝美術館常務理事）
- (2) 2017年1月21日～29日 山陰合同銀行鳥取ギャラリー「イラストレーター毛利彰

私の好きな一点展」参加438名

- (3) 2017年6月24日 県民ふれあい会館「第2回定例総会&講演会」参加30名、講演「イラストレーター毛利彰とその作品」筒井宏樹（鳥取大学地域学部附属芸術文化センター准教授）
- (4) 2017年12月9日～2018年1月8日 鳥取県立図書館「イラストレーター毛利彰『本の仕事原画展』」参加約800名
- (5) 2017年12月9日 鳥取県立図書館「トーク&講演会」参加47名、トーク・講演「イラストレーター毛利彰と本の世界」筒井宏樹（同上）、永井伸和（認定NPO法人本の学校理事）、毛利葉（イラストレーター毛利彰の会代表世話人）
- (6) 2017年12月16日 鳥取県立図書館「ワークショップ」参加24名、ワーク「イラストレーター毛利彰の仕事を地域にどう活かすか」《地域に活かす》安藤隆一（総務省地域力創造アドバイザー）、《教育に活かす》蔵多敏夫（鳥取西高等学校教諭）
- (7) 2018年3月1日～27日 わかさ生涯学習情報館「イラストレーター毛利彰『本の仕事原画展』」参加約200名、同年3月25日 同館ロビー「トーク」毛利葉（同上）参加10名
- (8) 2018年4月1日～25日 南部町立天萬図書館入口・カウンター付近「没後10年記念巡回展 イラストレーター毛利彰『本の仕事原画展』」参加のべ1,000名
- (9) 2018年6月11日～7月6日 鳥取大学附属図書館及び鳥取大学CDL「イラストレーター毛利彰原画展 IN 鳥取大学」、6月21日、26日 附属図書館「トーク毛利彰と本の仕事」毛利葉（同上）参加約35名、6月17日 CDL 講演「毛利彰と鳥取」筒井宏樹（同上）参加25名、《期間中》ラボ・サロン「ミニ美術展と地域づくりのイベントティーサロン」村瀬謙介（鳥取大学地域価値創造研究教育機構地域連携コーディネーター）
- (10) 2018年7月6日 鳥取大学附属中学校研究大会「毛利彰」をテーマに研究授業 木村信一郎教諭（美術）
- (11) 2018年7月14日～8月26日 鳥取市あお

- や郷土館「没後10年記念イラストレーション展 毛利彰とその家族」参加1,884名, 7月14日 同館展示室「ギャラリートーク」毛利みき(イラストレーター, 毛利彰長女)参加約70名, 7月29日 鳥取市青谷町総合支所「フォーラム イラストレーションによるまちづくりフォーラム in あおや」小谷育弘(武蔵野美術大学名誉教授, 伊勢丹時代の毛利彰の同僚, アートディレクター), 筒井宏樹(同上)他 参加約80名
- (12) 2018年9月21日～10月7日 日南町美術館「イラストレーター毛利彰の仕事」展 参加305名
- (13) 2018年10月6日 県民ふれあい会館「第3回定例総会」参加11名
- (14) 2018年11月20日 青谷中学校でのミニ展示と研究授業 河本俊顕教諭(鳥取県エキスパート認定教員:美術)
- (15) 2019年1月26日 県民ふれあい会館「ブックレット出版記念会」筒井宏樹(同上), 尾崎信一郎(鳥取県立博物館副館長兼美術振興課長), 木村信一郎(鳥取大学附属中学校美術担当教諭), 奥村寧子(鳥取市あおや郷土館学芸員)他

<普及・販売>

- (1) イラストレーター毛利彰の原画ポストカード6種類(各150円), クリアファイル1種類(300円)の作成・販売
- (2) ブックレット『イラストレーター毛利彰の軌跡:鳥取美術と戦後日本のイラストレーション史のなかで』の編集 著者 筒井宏樹(同上), 2019年1月31日発行, 500円税別, A5判64頁, 鳥取県文化芸術活動支援補助事業

発足から2年余りが経過したが, この会に専念できる人材はいない。忙しい日々の暮らしの中で会の活動に時間を割けるメンバーも少なく, 遅々とした歩みである。しかし, すでに3回の総会と19回の世話人会を開催し(2019年1月31日現在), ボランティアな市民文化活動として着実に前進している。それは, 自発的な意思で参加し, 誰からの指示も受けることなく, みんなで決定して動き, それぞれの能力と生活の範囲で責任を取り合って活動を支えているからだろう。

イラストレーションの歴史は浅く, イラストレー

ターを顕彰する活動や芸術的, 社会的な価値を評価する研究も少ない。しかし, 戦後日本のイラストレーションは大衆社会が生み出したものであり, イラストレーター自身が生活をかけてアートを体現してきた存在である。顕彰や研究の中核にも, 子どもから年配の方まで普通の市民が参加し, その周りを研究者や行政が支えていくスタイルが望ましい。

軌を一にして宮崎でも, 「スター・ウォーズ」や平成の「ゴジラ」シリーズで有名なSFイラストレーター生頼範義を顕彰する会《一般社団法人生頼範義記念みやざき文化推進協会》が2016年12月に発足し, NPO法人宮崎文化本舗等が運営する宮崎市の指定管理施設「みやざきアートセンター」を拠点に活動が始まっている。東京中心と思われるイラストレーターを顕彰・研究する活動が地方から広がることを期待したい。

会の活動として現在急がれる課題は, (1)の「収集・整理・保存」である。原画の保存・管理や作品のデータベース化の計画をたて, 推進体制を整えることが望まれる。また, 財政基盤の確立も急がれる。会の持続的発展のためにも, 法人化を見据え, 会費や寄付金, ブックレット, ポストカード, クリアファイルの普及による事業収入の確保等, 収益を上げる取り組みが必要となっている。(毛利葉)

第3章 イラストレーター毛利彰・原画展 IN 鳥取大学

1 本の仕事原画展

イラストレーターとしての毛利彰作品には, ブックカバーや新聞小説の挿絵など, 本や書籍に関連するものが少なくない。

鳥取県内では, 鳥取県立図書館と県内各図書館とのネットワークが充実しており, 2016年度には「地域の役に立つ図書館」としてその強固な連携事業が評価され, NPO法人知的資源イニシアティブの主催する「Library of the Year」においてライブラリアンシップ賞を受賞した。このたび, 毛利彰の書籍に関連した業績をフィーチャリングするにあたり, この県内図書館ネットワークを活かし, 複数の図書館で「イラストレーター毛利彰 本の仕事」と題した原画展を催行するに至った。

実施したのは, 鳥取県立図書館(2017年12月9日～2018年1月8日), わかさ生涯学習情報館(2018年3月1日～27日), 南部町立天萬図書館(2018年4月1日～25日)および, 鳥取大学附属図書館中央

図書館（2018年6月11日～7月6日）である。

この項では、鳥取大学での原画展について記述し、図書館、特に大学図書館において毛利彰の周知活動を行う意義について考えたい。

鳥取県立図書館、わかさ生涯学習情報館、南部町立天萬図書館と続く本展を、鳥取大学で実施する目的は、主な利用者である学生、つまり、毛利とは時代を異にする若い世代へ鳥取出身のクリエイターの存在を知らしめることである。

中央図書館は鳥取キャンパスのほぼ中央に位置し、一日の入館者数平均は1,700～1,800人、これは鳥取キャンパスに在籍する学生の約3分の1に相当する。さらに、特によく利用される1階のラーニングコモンズ（協調学習スペース）はその入館者の約7割をしめる。また、鳥取大学は、鳥取県出身の学生の割合が2割程度であり、他県出身者の割合が非常に高い。毎年4月の新入学の時期には鳥取県を知るための各種書籍を展示し、好評を博している。

これらのことから、メインの展示場所を入館ゲートからラーニングコモンズに向かうホールと定め、原画などは額およびガラスケースに収納するものの、毛利彰が装幀を手掛けた書籍は、その実物を手にとって見る事ができるようハンズオン式に展示した【写真1】。

展示した原画・書籍の主なものはおりのとおりである。

<原画（書籍表紙カバー）>

- (1) 作 グリム、文 藤田圭雄『しらゆきひめ』偕成社、1968年
- (2) 手塚治虫『火の鳥 鳳凰編』角川書店、1986年
- (3) 笹沢佐保『真夜中に涙する太陽』カドカワノベルズ、1987年
- (4) 岩川隆『上着をぬいだ天皇』角川文庫、1987年
- (5) 五木寛之『風の王国』新潮文庫、1987年
- (6) 大岡昇平『野火』新潮文庫、1987年
- (7) 西村寿行『凧の犬』角川書店、1991年
- (8) エミリア&エドワード・トーポリ、吉浦澄子訳『公爵夫人ターニャの指輪』新潮文庫、1993年
- (9) 五十嵐均『インディアナポリスの鮫』読売新聞社、1995年
- (10) 『歴史群像シリーズ 44 秦始皇帝』学研、1995年
- (11) 手塚治虫『ハトよ天まで2』中公文庫コミック版、1996年

- (12) 山田風太郎『妖異金瓶梅』廣済堂文庫、1996年
- (13) 早坂倫太郎『大岡奉行影同心一 幻蝶軒人剣 疾風烏狩り』廣済堂文庫、1999年
- (14) シェークスピア『ロミオとジュリエット』永岡書店（未発行原画）、1988年頃
- (15) 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』永岡書店（未発行原画）、1988年頃

<原画（企業等広告）>

- (1) 日蓮 700 遠忌 ポスター、1980年
- (2) ミスタードーナツ パッケージ、1984年

<書籍>

- (1) 飯干晃一『狼どもの仁義』講談社、1974年
- (2) 曾野綾子『テニス・コート』角川書店「野性時代」、1979年
- (3) 有田みち子『あなたはピクシー』伊藤出版、1982年
- (4) 五木寛之『風の王国』新潮社「小説新潮」、1984年
- (5) 山本嘉将『扇山集』1988年
- (6) 水島新司・佐々木守『男どアホウ甲子園』秋田文庫、1996年
- (7) 横山光輝『チングスハーン』秋田書店、1991年
- (8) 夏樹静子・五十嵐均『βの悲劇』角川文庫、2000年

他、数点の『歴史群像シリーズ』等の書籍を展示



写真1 ロビーに展示された「原画」と「書籍」

また、会期中に二回、毛利葉によるギャラリートークを実施した【写真2】。時間帯を入館者の多い昼休みに設定し、30分間、展示スペースを巡回しながら資料の説明を行う形式とした。トークの内容は、毛利秋晃と毛利彰の人となりになり、原画や書籍



写真2 ギャラリートーク

およびそれらにまつわるエピソードをわかりやすく解説する構成としたが、「本の仕事原画展」の名のとおり「その人と本」と題して太宰治の「人間失格」や「ヴィヨンの妻」などを引用した解説に、参加者から多くの質問がなされていた。

昼休みに通りかかって参加した学生を含め、二日間で計35名の参加者があり、終了後、「見かけたことのある絵を描いたのがこんなに近い人だったとは驚きだった」「他の作品も見たい」との声が聞かれた。これらは、後述するコミュニティ・デザイン・ラボでのミニ美術展にも誘導することができたといえる。

大学図書館は、「情報の収集・提供」という機能において、電子資料（電子書籍・電子ジャーナル）による非来館型図書館を推し進めながら、かたや、活字離れを食い止めるべく紙の書籍の貸出冊数増加策にも知恵をしばっている。鳥取大学附属図書館もその例外ではないが、その一方で、「人の集まるスペース」「気軽に立ち寄れる場所」「協調学習空間」という、図書館の「場の提供」という側面においては、キャンパスの中で十分その機能を果たしていると考えている。

また、前述のとおり他県出身者を多く含む鳥取大学生が、あまり交通が便利とはいえない鳥取市で、わざわざ出向くことなく先人の業績に触れられたことも、学生の関心の向上に有効であった。図書館は常に必要な資料を所蔵し、利用者（学生）が得た関心を掘り下げ広げていくことが可能な施設だからである。そして、肝要なのは、それがいつも利用者（学生）の身近に存在することである。

今回、毛利彰の「本の仕事」から出発し、書籍→図書館という連想から開催した原画展であったが、約1か月の会期中、展示を目にした図書館利用者は

のべ1万人を超えたことになる。これは、図書館という場の選択が効果的であったことを示しており、さらに、「イラストレーター毛利彰の会」の活動が、大学図書館という新たなチャンネルを通じて波及する足掛かりを得たと考えられるものでもある。

なお、本展示に関して、2018年6月、日本海新聞「図書館出合いの広場」に寄稿したことを補足する。（尾崎文代）

2 ミニ美術展とラボ・サロン

鳥取大学がより地域に根ざした大学となるための中核組織「地域価値創造研究教育機構」が2017年の10月に設立された。同機構は、地域社会の抱える様々な地域課題の抽出・整理やその解決に向けた技術・システムや人材育成プログラムの研究・開発を、地域の当事者と本学の研究者や学生が協働で行う取組（地域参加型研究）やそうした実践的な活動を協働で行うことを通じて、地域課題を発見し解決する力を備えた人材を育成する取組（地域実践型教育）を融合的に推進するための架け橋にと作られた。

機構の設立とともに開設されたのが、鳥取大学正門に入ってすぐの広報センター1階にある「鳥取大学コミュニティ・デザイン・ラボ」であり、新機構による様々な活動をスムーズかつ活発に行っていくための拠点である。

こうした、地域の住民、学生、教職員をはじめ、様々な立場の方が使用することができる場を活用し、先述の鳥取大学附属図書館での「本の仕事原画展」と同時期にミニ美術展「毛利彰の代表作とデッサン展」を行った。

展示作品は、伊勢丹ファッションポスターやその時代のデッサン、〈火の鳥 鳳凰編〉〈ミスタードーナツ企業広告〉〈マイ・マドンナ〉〈堤清二 (WILL 表紙)〉〈吉田泰久先生像〉〈呪われた少女〉〈サントリー企業広告〉〈なら・シルクロード博〉〈ガードの風景〉など17点。2018年6月11日から7月6日の展示期間で地域住民、教職員、学生合わせ延べ525名の来場者があった。開催に合わせ6月11日からの5日間は利用の多い正午から「ラボ・サロン 毛利彰を街に生かす」というワークショップを行った。これは来場者に毛利彰の作品を観ていただいた上で、鳥取の街にどう展開・浸透させるかを考えていただくものである。アイデアを付箋に書き、ホワイトボードに貼ってもらった【写真3】。他の方のアイデアを見て、芋づる式にアイデアが湧き出たり、

筆者がコミュニケーションを取り会話の中よりアイデアを抽出したりした。中には、毛利彰が生前当時にはなかった現代技術やメディアと掛け合わせたアイデアもいくつか見受けられた。鳥取大学の資源を活用するアイデアも出た【写真4】。

出されたアイデアを「展示系」、「イベント系」、「グッズ活用」、「その他」の4項目にグループ分けをした。



写真3 参加者による付箋でのアイデア出し



写真4 グループ分けしたアイデア

表1 ワークショップでのアイデア

■展示系

- ・鳥取西高に絵を飾る
- ・駅に展示
- ・空港に展示
- ・瑞風停車駅で展示
- ・空き店舗を活用した展示会

■イベント系

- ・夜の鳥取駅にプロジェクションマッピング
- ・ファッションショーをする
- ・伊勢丹の広報と毛利さんの絵を使った街おこしを考える
- ・アトリエで上映会や読書会
- ・レタリングワークショップ
- ・イラストコンペを開く -第2の毛利彰はどいつだ-
- ・アニメ化
- ・VR 毛利彰の世界

■グッズ系

- ・毛利 Tシャツを作る
- ・毛利作品のポストカードを作り市民に無料で配る
- ・LINE スタンプを作る
- ・ジグソーパズルにする
- ・キーホルダーなどを作ってお土産屋で売る
- ・写真撮影用のパネルを作る
- ・毛利作品をファイルに

■イラスト活用 その他

- ・使用権をタダにする (くまもんみたいに)
- ・まちのシャッターに絵を描く
- ・大学研究者が本を出すときの表紙で使う
- ・画材屋さんのポスター (広告で)
- ・マンホールの柄に (隠れ毛利をさがせ!)
- ・駅の床に絵を描く
- ・オープンキャンパスや学祭で、イラストを活用させていただく
- ・入試のポスターにイラストを使わせていただき、受験生 (芸術的感性のある) の拡大を図る
- ・広告ジャック

参加者には、実現可能不可能関わらず何の制約もなしという条件でアイデアを出していただいた。地域課題ではないが、毛利彰作品の鑑賞とワークショップにより、地域における文化に対する興味や思考を可視化することに成功した。毛利彰作品をただ活用するというだけでなく、その先の、街を「生かす」ことに着目したアイデアも少なくなかったということにも記憶を留めておきたい。(村瀬謙介)

第4章 新たな地域での文化運動として

本稿では、毛利彰の人と作品、毛利彰をテーマとした地域での文化運動の概要、その中の鳥取大学附属図書館や同 CDL での「イラストレーター毛利彰・本の仕事原画展 IN 鳥取大学」を中心とした一連のイベントなどをみてきた。

ここで、あらためて地域の文化にとって有効な政策としての「地域（公立）美術館建設」と「アートフェスティバル」について考察してみよう。

「山梨県立美術館ガイド」というパンフレットによると、「1978年の開館から30年以上も「ミレーの美術館」として親しまれている山梨県立美術館。現在では、約1万点の絵や彫刻を所蔵しています。それらは「ミレーとバルビゾン派の作品」と、「山梨県に関係の深い作品」に大きく分けることができます」とある。この美術館の観覧者数は2018年3月末までに、延べ約1,332万人にのぼるといふ。この40年間で、年平均で33万人を超える計算である。「今では格別おどろくことでもなくなりましたが、公立の美術館で作品一点を億の単位で購入することは、稀有のことでした。「種まく人」は一億七〇〇万円、「夕暮れに羊を連れ帰る羊飼い」は七五〇〇万円、(中略)田辺知事(当時)が後に「清水の舞台から飛び下りる気持ち」といわれましたが、知事の文化行政に寄せる高い見識と決断によって山梨県立美術館は、見事な船出ができ⁽¹⁴⁾」、現在、地域の文化振興や観光資源としても成功を収めている事例といえる。

また、2004年に開館した金沢市立金沢21世紀美術館は、年間入館者数が130万~170万人程度で推移していたが、新幹線の開業を受けて2015年から200万人を突破した。美術館という開発された新しい文化資源と「兼六園や歴史的な街並み」、「加賀友禅や九谷焼」、「和菓子や郷土料理」といった元々地域にあった歴史的資源との相乗効果が、相まってこのような入場者数を生み出した。これは1つの美術

館が起爆剤となって地域振興に大いに貢献した事例である。

先行する山梨県立美術館に続き、1990年代には地方自治体がいわゆる「ハコモノ」行政の一環として次々に美術館や文化（音楽）ホールを建設し、地域文化の活性化やそれらを観光資源として活用することで、経済的地域振興をも図ろうとした。

しかしながら、現在、多くのこうした施設は次のような状況である。「公立美術館が税金を投入して創設され管理運営されているなら、住民の側から美術館に何を求めるのかも併せて検討されるべきである。ところが、住民にとって美術館は馴染みのある場所ではないし、まず敷居が高いと思われる⁽¹⁵⁾。」

このように、公立美術館の全てが十分に地域文化の活性化や地域振興に寄与しているわけではない。更に、「地域一とりわけ、市町村一によっては、財政破綻が強く叫ばれるなかで、その地域の産業や歴史を展示した立派な建築物—いわゆるハコモノ—の維持・管理が大きな財政負担となってきたことで、廃館あるいは売却をめぐってさまざまな議論も起こってきたのである⁽¹⁶⁾。」山梨県立美術館や金沢21世紀美術館のような成功例はそんなに多くはなく、美術館建設による地域の文化の活性化については多くの問題を抱えている。

もう1つの地域の文化活動の動きとして、地域でのアートフェスティバルがある。「二〇〇〇年代に、日本各地では現代美術を核とした芸術祭が数多く開催されるようになった。新潟県の広域里山エリアを舞台とした二〇〇〇年の「大地の芸術祭、越後妻有アートトリエンナーレ」と横浜市都心臨海部を中心に開催された二〇〇一年の「横浜トリエンナーレ」という二つの芸術祭がその先駆けといえるだろう⁽¹⁷⁾。」

こうした地域での動きは、市民が文化・芸術活動に参加する機会として、重要な役割を果たしているといえる。それは、市民が作品を享受するというだけでなく、アートフェスティバルの作品制作の担い手の一部として参加するという有効性もあるからである。

しかし、成功例として名高い新潟県の「越後妻有アートトリエンナーレ」をみると、参加人数の多さや他地域への情報発信、あるいは観光政策としての経済効果などといった成功の側面とは別に、

「しかし、芸術祭の対象地域からは大きな反発を受けることになった。作品の設置を巡って地域住民か

らの反対や各自自治体の議会でも批判的な意見が飛び交った⁽¹⁸⁾」と、必ずしも地域住民の手による、本来の「地域づくり」という側面では問題点を残しているようだ。

もちろん、ここいう問題に対して、「こへび隊」という「世代・ジャンル・地域を越えた」自主的なボランティアを組織して、地域への浸透を図り、理解を深めるようにしている。そして、その内容は、「メンバーは流動的ですが、これまで約 2000 名を超える中高生から 80 代まで幅広い世代の人々が首都圏を中心に全国および海外から集まっています。美術や建築に限らず、経済、福祉、社会学、語学などを学ぶ学生や、主婦や仕事を持つ人から、作家やスタッフの家族まで多様な人々が参加しています⁽¹⁹⁾。」である。

そもそも、住民自身が地域の文化活動として、自発的にこのアートフェスティバルを始めたものではない。これは、新潟県という行政の政策である「ニューにいがた里創プラン」から始まっているものであり、地域からのボトムアップとして盛り上がったものではない。だから、当然、住民は「何のためにやるのか、やって効果があるのか、むしろ、日常生活に支障をきたすのでは」などの疑問が出て当然である。

住民の多くが欲しないものを、他地域（首都圏を中心に全国および海外）からボランティアがやってきて、説得するのは本末転倒と言えるのではないだろうか。こうした問題の解決は今後の課題として残されるであろう。

さて、美術館建設やアートフェスティバルには、両者とも、多大の費用を必要としている。そのためどうしても行政が中心的にそれを担い、その主導を行わざるを得ない。もちろん、こういった政策が地域の文化の振興や、その結果としての観光の振興や経済の活性化に一定の役割を果たしていることは事実である。

しかし、こうした行政主体の文化政策が、そこに住む地域の人々にとって、「真に芸術や文化を享受するためのもの」となっているかといえ、必ずしもそうとは言えないのである。それは、「はじめに」で前述した長野県飯田市における「菱田春草の運動」のように、地域の人々が考え、地域の人々が担ってきた地域の文化運動とは、その本質を異にするものであるからである。

本稿でみてきた鳥取県立図書館での「イラストレ

ーター毛利彰・本の仕事原画展」や鳥取大学附属図書館及び同 CDL での「イラストレーター毛利彰・本の仕事原画展 IN 鳥取大学」においては、全く行政と連携しないかたちで進めてきたものではない。それは、地方公共団体の直接の文化政策の担当セッションとの連携ではないが、国立大学や県立図書館といった広義の行政機関（公共施設）とは、一定の連携を図っているからである。

しかし、その場合、あくまでも「イラストレーター毛利彰の会」という民間団体がその企画を提案し、その主体性を保って実施しているところに意味がある。つまり、「市民主体の文化政策」と言っても過言ではないだろう。

そうした中、逆に、鳥取大学附属図書館や同 CDL についても、このイベントをとおして、それらの機関が「読書の振興」や「地域づくりへの寄与」など、自らの目的も達成しているのである。

これまでにみてきた全体の「イラストレーター毛利彰の会」の運動は、今後、飯田市の「菱田春草」のそれと同様、今後「毛利彰」という地域出身のアーティストの正当な評価を行い、それを地域に定着させると共に、その作品を街中で見られる機会を提供するといった展開が期待できる。また、地域での他の文化活動との連携によっても、それらとの相乗効果が生まれると考えられる。

このように、こうした運動を「地域の住民」自らの手で行うことで成果を生み、その結果、「芸術や文化」といったものが、真に住民自身のものとなっていくことを期待したい。（安藤隆一）

注

- (1) 森敬編著『市民文化と文化行政 シリーズ自治を創る 2』学陽書房、1988 年、1 ページ。
- (2) イラストレーター毛利彰の会 会則第 3 条
- (3) 小林真理編著『文化政策の現在 3 文化政策の展望』東京大学出版会、2018 年、87 ページ。
- (4) 後藤総一郎『郷土研究の思想と方法』伝統と現代社、1981 年、247 ページ。
- (5) 筒井宏樹『イラストレーター毛利彰の軌跡：鳥取美術と戦後日本のイラストレーション史のなかで』イラストレーター毛利彰の会、2019 年。
- (6) 「ヒサマツミドリシジミの生活史解明者に賞として本学会より金一万円を贈ります」『蝶と蛾』12(3)、1962 年、64 ページ。また、下記の文献を参照した。山陰むしの会編著『山陰のチョウたち』山陰中央新報社、1994 年。毛利彰の

イラストレーションにおける蝶について鳥取大学農学部教授鶴崎展巨先生からご教示を得た。記して感謝いたします。

(7) これらのノートは毛利葉氏所蔵。

(8) 角秋勝治×毛利彰「頑固一徹“現代の絵師”毛利彰」『角秋勝治対談集 創造への旅Ⅱ』今井書店, 1996年, 236～237 ページ。

(9) 長友啓介「故毛利さんは僕が学生の頃, … (略) … 毎日のようにご飯を食べさせて貰った恩人だ。口数が少なくシャイな方だが, 僕達のような若い者の話をちゃんと聞いてくださった。」(ブログ「アートディレクター長友啓介の日々@好日」2008年9月25日)

(10) 2011年8月1日～31日 広島蝶鮫青空館 ひろしまNPO センター空き家を活用した芸術作品展「イラストレーター・毛利彰の世界」(広島市佐伯区湯来町)

2012年4月22日～5月31日 NPO 法人遠足計画 遠足文庫オープニングイベント「毛利彰原画展」(鳥取市河原町)

2015年4月1日～30日 アートギャラリークレマティス企画「毛利彰展」(鳥取市今町)

(11) 2015年8月21日 第8回知のカフェ「イラストレーター毛利彰の全仕事・作品を街にどう生かすか」を, 原画の鑑賞とあわせて, 松原雅彦(あおや郷土館元学芸員)をゲストに迎え, 鳥取大学地域学部サテライトキャンパス SAKAE401 で開催。

(12) 2015年11月19日 「イラストレーター毛利彰をより深く知り, 鳥取の誇りにする集い」を, 原画の鑑賞とあわせて, 紙原四郎(地元のデザイナー・切り絵作家)等をゲストに迎え, 鳥取大学地域学部サテライトキャンパス SAKAE401 で開催。

(13) 鳥取市青谷町のまちづくり団体。毛利彰の長女みきの青谷小学校時代の同級生や先生を中心に, みきのイラストを夏まつりの灯ろうやTシャツ, 青谷町のマップ等に活用している。

(14) 千澤楨治「山梨県立美術館の誕生とその歩み」『ミレーと山梨県立美術館』朝日新聞社, 1982年, 127 ページ。

(15) 辻みどり・田村奈保子・真歩仁しょうん『文化資産としての美術館利用』公人の友社, 2012年, 5 ページ。

(16) 寺岡寛『地域文化経済論—ミュージアム化される地域』同文館出版, 2014年, 28 ページ。

(17) 小林真理編著『文化政策の現在 2 拡張する文化政策』東京大学出版会, 2018年, 53 ページ。

(18) 同上 61 ページ。

(19) kohebi.jp/ideal/